

【原著】

沼田良蔵・實文書について

——幕末三原の漢学者から明治大正昭和公立学校長への転身——

白石 崇 人

Document about Ryozo and Minoru Numata:
Change from a Confucianist in Mihara in the Edo Period
to a Principal of Public Schools after the Meiji Period

Takato Shiraishi

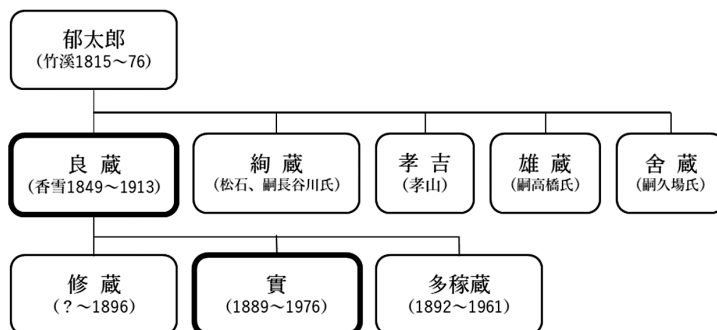
はじめに

本稿の目的は、広島県三原市の旧沼田實邸に残る沼田良蔵・沼田實の史料（まとめてここでは「沼田家文書」とする）について紹介し、その史料的価値を明らかにすることである。

旧沼田實邸は、三原駅の近くにある一軒家である。図1の通り、沼田良蔵（嘉永2（1849）年生～大正2（1913）年没、号は香雪）は漢学者・沼田郁太郎（竹溪）の長男であり、良蔵自身も漢学の素養があつて明治期に漢学塾を開いた。また、広島県師範学校を卒業して小学校教員の正資格を取った後、長年、三原尋常高等小学校長を務めた。明治初期において漢学の素養のあつた小学校教員は少なくないが、明治末まで勤めて小学校長の職務の傍ら漢学塾を経営していた事例は知られていない。江戸期の教育と明治期の教育との連続・非連続を捉えようとするとき¹⁾、このような履歴の人物は貴重な研究対象となりうる。

沼田實（明治22（1889）年生～昭和51（1976）年没）はその良蔵の二男であつた。墓碑には「祖父郁太郎父良蔵の志を継ぎ三代に亘り教育に尽粹」とあり²⁾、祖父や父を意識しながら教職に携わつたことがわかる。父良蔵のつくつた漢学塾（藹然舎）や三原教員養成所（御調郡私立小学校教員養成所）で学んだ後、広島県師範学校・東京高等師範学校に入学して、岡山・愛媛

図1 沼田家図



出典 次を参照して白石作成。石川忠久『香雪遺稿』神前温子、1999年。
金行二郎編『御調』第3号、御調学生会事務所、1897年、23頁。

の師範学校や公立高等女学校・中学校で校長を歴任した。戦後は、私立新田中学校校長を務めたのち、昭和30（1955）年に広島女子商業高等学校校長兼広島女子商業学校校長に着任した（昭和38（1963）年まで）。實は小学生の時に父の漢学塾で四書の素読を始め³⁾、漢学者の家系の雰囲気の中で生まれ育った。そして、師範学校・高等師範学校という正系の教員養成ルートを経由して父の学歴・職歴を超え、公立中等学校校長を務めるに至った。戦前に引き続いて、戦後に新制中学校長・高等学校長を歴任した点も注目したい。戦前の教育と戦後の教育との連続・非連続を捉えるとき、やはりこのような履歴の人物は貴重な研究対象になりうる。

沼田良蔵・實は、幕末から昭和にかけて地域の教育史を作った教職者であった。令和2（2020）年11月、白石にご遺族から沼田家所蔵の漢籍や良蔵に関する史料の調査について依頼があった。その後、打ち合わせの中で沼田實の史料の重要性も確認され、令和3（2021）年3月・4月・8月に現地に入って史料の概観を調査した。なお、漢籍の調査については、東九州短期大学の井上快氏に依頼して調査協力を仰いだ。まだ調査中の沼田家文書だが、まずは現段階で判明したその史料的価値を明らかにしたい。

また、今回は対象外だが、良蔵の三男多稼蔵は陸軍中将まで昇り、戦後に防衛相顧問を務めた人物である。沼田家文書には、多稼蔵の学生時代の史料も含まれている。早世した良蔵の長男修蔵についてもその学生時代（閑谷饗関係）の史料が若干残っている。良蔵の弟高橋雄蔵も長く小学校教員を務め、良蔵の後任として三原尋常高等小学校長となった。今後を期して付記しておきたい。なお、研究対象としての人名はすべて敬称略とする。

1. 漢学者から公立小学校教員へ

(1) 漢学者・沼田郁太郎（竹溪）

沼田家が漢学者の家系になったのは、沼田郁太郎（竹溪、1815～76）の業績によるものと思われる。竹溪は、三原藩士の子として生まれた。幼少期から学をたしなみ、8歳の時に『通俗三国史』を読んだ⁴⁾。文政8（1825）年、11歳の時に明善堂に入って、石井豊州に経史を学び、

表1 沼田郁太郎（竹溪）年譜

文化12（1815）年	三原新町にて喜三の子として生まれる。
文政5（1822）年？	8歳の時、『通俗三国史』をよく読む。
文政8（1825）年	郷校明善堂（文政3年創立）に入り、石井豊州に経史を学び、都築蘇門・鷺州に学ぶ。
	久しく明善堂の教官を務めながら、家塾を開く。
慶應初年（1865～）	主命によって甲奴郡本郷村に修静館を開く。
維新後（1868）	修静館を閉じて私学を再興（～明治5年）。
	豊田郡米山寺に学塾を開く。
	のち、三原菁莪舎を設置。
明治8（1875）年	1～7月、三原小の前身校で教員を務める。
明治9（1876）年	病没。

出典 手島益雄『広島県統儒者伝』東京芸備社、1925年、15頁。文部省編『日本教育史資料 参』、文部省、1892年、439頁。中宿俊一編『創立六十年史』広島県三原尋常高等小学校、1933年、67頁。

都築蘇門・鷺州に詩文を学んだ。明善堂は、三原を治めた広島藩筆頭家老の浅野家が、三原の家臣子弟の教養の道を立てるために文政3（1820）年に設置した郷校であった。明善堂での学修は、おおよそ次のようであった⁵⁾。まず、四書の素読を終えて、五経もしくは唐詩選・三礼・詩等に移り、文選等の素読をなす。次に、論・孟・大学・蒙求等の講義を授けられるかたわらその輪講をなし、十八史略・元明史略・国史略等の講義を授けられた。特に学力鋭敏で自読して意義を解する者は、自習で質問させ、順次他の経書・諸子百家の書を涉獵させた。入学は普通8・9歳であったというから、竹溪の入学は少し遅かったと考えられる。竹溪が師事した石井豊州（儀右衛門）は、頼春水に従って経義を修めるかたわら詩文をよくし、京で尾藤二洲に師事した後に浅野家に招聘された人物であった⁶⁾。竹溪は、香川多仲（のちに明善堂総裁）と久野勝右衛門とともに「豊州門下の松竹梅」と称され⁷⁾、実際その後教官を長く務めたのだから、明善堂では優秀な学生の一人だったのであろう。ただ、遊学できず、篠崎小竹に書簡で教えを乞いながら学問を続けた。明善堂の教職の余暇に開いた家塾（天保14（1844）年頃開業か）は男子30人ほどの塾生をもち、嘉永6（1853）年ごろには隆盛をむかえたようである⁸⁾。その後、慶應年間に入って主命によって甲奴郡本郷村に修静館を開いたが、維新後には私学を再興して明治5（1872）年まで教えたという（明治4年廃業という説もある）。次いで、豊田郡米山寺に学塾を開き、それから三原に菁莪舎を設けた。著作に『桂園詩集』（所在不明）と『竹溪遺稿』（『香雪遺稿』に再録）があり、多くの漢詩文を残した。「従遊頗る多し」と伝えられており、おそらく漢詩を通じたネットワークを通じて活発に往来したと思われる。

(2) 漢学者・沼田良蔵（香雪）の公立小学校教員・校長への転身とその活動

沼田良蔵（香雪）は、竹溪の長男として生まれ、明善堂に6歳で学んだ。良蔵が明善堂の教職に就いた年と思われる文久3（1863）年は、領主の浅野家が家臣を率いて三原に移住し、あわせて元々広島にあった学校の朝陽館を明善堂に合併させた年であった⁹⁾。良蔵は、明善堂の学政改革の中で同校の教授を担うことになったといえる。なお、天保10（1839）年頃から宇都宮龍山が三原と尾道を往来して教授に取り組んでおり、良蔵はこれに師事して経史を研鑽した。龍山は、伊予国新谷に生まれ、若いころから護園（徂徠学派）の書を読み、山田東海に訓誥学を受け、江戸に遊学して古賀侗庵に入門して性理学を学んだ人物であった¹⁰⁾。良蔵は、父竹溪と同様、基本的に漢学者として成長した。

明治6（1873）年4月、良蔵は因島重井村の善興寺で振徳学舎の教師を務めたというが、すぐ後に広島に上って遷喬舎に入学した。遷喬舎は、元は広島藩校の修道館を継承して英語の講習を行い、明治5（1872）年10月に師範学科を置き、明治6年4月には公立化したばかりであった¹¹⁾。遷喬舎は明治7（1874）年6月に廃止され、代わりに同年7月に県が公立の教員養成校として白鳥学校（のちの広島県師範学校）を設けた。白鳥学校最初の卒業生は同年9月に入学して12月に卒業したが、良蔵の名はそこにはない。良蔵は、明治8（1875）年6月、広島県公立師範学校の下等科（同校は同年4月に白鳥学校から改称。下等科の修業期間は3か月）を卒業した。良蔵は、明治6年に広島県による教員養成開始を知り、さっそく広島に上って遷喬舎に入学したのだろう。しかし、すぐに同校廃止に遭って、その後、白鳥学校または県公立師範学校に入学し直してようやく養成課程を遂げたものと思われる。

明治5年の学制により、全国に近代学校制度が導入され、各地に小学校が設置されることになった。小学校教育の方法はそれまでの手習塾・学問塾の方法とは異なり、同一内容・同時一斉教授によることになった。明治8年当時、その教則・方法を習得した教員は全国にもほとんどいなかった。良蔵は師範卒業後すぐに三原に戻り、明治8年7月に香積寺にあった思齋館（翌

年に西小学校)の首座教員となった¹²⁾。明治10(1877)年には、三原の学校教員の中で最高月給を受給した一人であり¹³⁾、地域においてその存在が貴重なものとされていたことがわかる。明治19(1886)年に三原小学校訓導兼校長に就任し、明治23(1890)年に三原尋常高等小学校校長となって、明治41(1908)年に退職するまで勤め続けた。三原小学校の前身校から数えて34年間、地域の小学校教育を担い続けてきた。

良蔵は、公立小学校教員・校長の業務の傍ら、様々な活動に取り組んでいた。第1に、漢学

表2 沼田良蔵(香雪)年譜

嘉永2(1849)年	三原郷校明善堂教授の沼田竹溪の長男として生まれる。
1854年?	6歳で明善堂に学ぶ。
1863年?	15にして明善堂の訓導となる。
	宇都宮龍山に入門して経史を研鑽。
明治6(1873)年	因島重井村の善興寺内に設置された振徳学舎に配置。
	遷喬舎(のち白鳥学校・広島県師範学校)に入学。
明治8(1875)年	6月、広島県公立師範学校下等科卒業。
	三原香積寺内の思齋館・西小学校に赴任。
明治10(1877)年	三原内の小学校教員で最高月給8円を受給。
明治13(1880)年	三原東小・西小を合併して旧三原城内に移して三原小学校となる。三原小の首座教員を務める(明治14年9月~15年2月, 明治16年3月~17年6月)。
明治15(1883)年頃	私塾藹然舎にて漢籍を教授。
明治16(1883)年	広島教育協会に入会。
明治17(1884)年	三原東西小学校校長心得に就任。
明治19(1886)年	三原尋常高等小学校訓導兼校長に就任。
明治22(1889)年	広島県私立教育会御調世羅郡地方理事を嘱託。
明治27(1894)年	御調世羅郡私立教育会の会長に就任。
明治31(1898)年	広島県私立教育会より多年県下の教育に従事してその功績顕著のため記念品を贈呈される。
明治33(1900)年	御調郡私立教育会, 私立小学校教員養成所を創設。その運営を行う。 ※臨時検定試験を行って免許取得する仕組み
明治36(1903)年	帝国教育会から、学制以来教育職務に従事してきた功績をもって功牌を贈呈。
明治40(1906)年	文部省より日露戦役中職務勉勵によって賞状・賞金を受給。
明治41(1908)年	三原高等小学校校長を退職。
明治42(1909)年	三原女子師範学校の設置。誘致運動に奔走した。
大正2(1913)年	没。

出典 沢井常四郎編『御調郡誌』1925年, 御調郡教育会, 84~85・391~392頁。広島県師範学校『広島県師範学校一覧』1916年, 205頁。『芸備教育』第35・42・90号。『教育公報』第271号, 70頁。『香雪遺稿』。中宿俊一編『創立六十年史』広島県三原尋常高等小学校, 1933年。『夕風亭別館(写真館)』https://2623crystal.blogspot.com/2015/04/blog-post_1.html, 2021.7.19参照

者としての活動である。竹溪の跡を継いで経史を講じ、同好の士や弟子も多く、「従遊数百師を見ること父の如し」というほど慕われていたという¹⁴⁾。塾は毎朝5時頃から始め、おそらくその後学校に出勤し、退勤後、夕方になってまた経書を教えていた¹⁵⁾。初期の塾名は判然としないが、弟子の回顧によると、明治15(1883)年頃に「藹然舎」であった可能性がある¹⁶⁾。第2に、御調郡教育会の会長としての活動である。明治31(1898)年に渋谷栄造の後任として会長になり、翌明治32(1899)年(明治33年説もある)に奔走して同会の事業として三原教員養成所を創立させた¹⁷⁾。同養成所は、明治41(1909)年3月に行われた臨時の小学校教員試験検定(尋常小学校正教員免許状)に対して95人を受験させ、そのうち28人を合格させた¹⁸⁾。また、県郡市教育会の集まる広島県聯合教育会に御調郡私立教育会の代表として出席し、委員を務めることもあった¹⁹⁾。第3には、広島県私立教育会員としての活動である。明治16(1883)年に広島県初の県教育会であった広島教育協会に入会し²⁰⁾、その後も広島県私立教育会(明治20年創立)の会員であり続けた。明治22(1889)年には同会の御調世羅郡地方理事を務め、当該地域の代表の一人を務めた²¹⁾。第4に、中央教育会(全国教育団体)の会員としての活動である。日本初の中央教育会であった大日本教育会(のち帝国教育会)の人名録には、明治21(1888)年9月の分に初出となり、明治36(1903)年には帝国教育会から功牌を贈呈されて名誉会員扱いとなった²²⁾。大日本教育会・帝国教育会は毎月教育雑誌を発行しており、良蔵は常に中央の発信する情報に触れていたことになる。

良蔵は、漢学者として身を立てたのち、師範学校を卒業して公立小学校教員に転身し、ついには三原をはじめ御調郡の小学校を代表する校長へと上り詰めた。その業績は大きく、広島県私立教育会(明治31年)、帝国教育会(明治36年)、文部省(明治40年)から賞された。郡教育会を動かし、私立の教員養成事業を興したことも注目すべきであり、後進育成にも努めた。小学校長を退職したのちも目覚ましい活動を行った。女子師範学校の誘致運動の先頭に立ち、三原の地に師範学校を設置させた。その運動ぶりは、「女子師範学校新設の議あるや土地の有力者に説き、東西奔走終に其志を達したり」と伝えられている²³⁾。

2. 中学校長・沼田實

沼田實は、良蔵の二男として三原に生まれた²⁴⁾。小学生のころから、早起きして父の塾生とともに四書の素読を始めた。良蔵は實に対して「教員になるのが良い、物質的には恵まれないが精神的に生き甲斐のある仕事出来る」と言ったという。實は、父が校長を務める三原高等小学校を卒業後、「師範学校に入る予備」として三原教員養成所に進み、さらに広島県師範学校に入学して卒業した。もともと師範卒後は高等師範学校に進学したい希望をもっていたが、広島にするか東京にするかで迷ったようである。結局、学校長推薦で無試験入学のできる広島高等師範学校を受験せず、入試を受けて東京高等師範学校に入学した。東京高師は「相当難関」であると認識しており、「浪人生活を覚悟」していたという。おそらく難関の東京高師に挑戦しなかったのだろう。また、弟の多稼蔵が東京中央幼年学校に進んでいたことも理由の一つだったようである。東京高師では数物化学部に入学して物理化学を専攻した。当時の校長は嘉納治五郎、予科で数学を林鶴一に学び、物理を後藤牧太・野田貞、化学を亀高德平・和田猪三郎、体操を永井道明に学んだ。なお、校友会の活動にも熱心に加わって、端艇やマラソン、剣道に励んだ。

高師卒業後は、大正2(1913)年から岡山県女子師範学校教諭兼附属小学校訓導、大正6(1917)年から愛媛県師範学校教諭を務めた。大正13(1924)年になると、愛媛県西条高等女学

表3 沼田實年譜

明治22 (1889) 年	沼田良蔵の二男として生まれる。
明治36 (1903) 年	三原高等小学校卒業。
明治38 (1905) 年	三原教員養成所卒業。
明治42 (1909) 年	広島県師範学校卒業，東京高等師範学校入学。
大正2 (1913) 年	東京高師数物化学科卒業，岡山県女子師範学校教諭兼附属小訓導に就任。六週間現役兵として岡山連隊入営。
大正6 (1917) 年	愛媛県師範学校教諭，舎監兼任。児童実験に重点をおいて附属小の理科教室改善に留意。
大正7 (1918) 年	生徒を連れて石鎚登山の実践を始める。
大正13 (1924) 年	愛媛県西条高等女学校校長兼教諭に就任。健康で明るい女性の育成につとめ，制服を洋服化し，スポーツを奨励。
昭和6 (1931) 年	愛媛県大洲中学校校長兼教諭。全国に普及し始めていたラジオ体操を取り入れるなど，まず健康管理に力を注いだ。
昭和10 (1935) 年	愛媛県今治高等女学校校長兼教諭。
昭和13 (1938) 年	愛媛県北予中学校校長兼教諭。運動競技を奨励するとともに，生徒を進学組・就職組に分けて編成指導。
昭和17 (1942) 年	愛媛県今治中学校校長兼教諭。
昭和20 (1945) 年	終戦にて公立学校長を依願退職。8月初め，私立新田中学校事務取扱。8月15日付で同学校長に就任。
昭和21 (1946) 年	愛媛県知事から教育功労者として表彰。松山語学専門学校の設置に奔走（翌年開校，昭和25年松山外国語短期大学に改組）。
昭和23 (1948) 年	新学制に対応して設置された新田高等学校・新田中学校長に就任。
昭和29 (1954) 年	新田高校・中学退職，松山外国語短期大学講師。
昭和30 (1955) 年	広島女子商業高等学校・広島女子商業学校長に就任。中高一貫教育を期して，健康管理や専門課程・家庭科の充実を図る。部活動の実績（珠算，軟式テニス，卓球）。
昭和38 (1963) 年	広島女子商業高等学校・広島女子商業高等学校長を退職。
昭和51 (1976) 年	没。

出典 村上節太郎編『沼田実先生教員生活五十年記念誌』大谷丈夫，1963年。広島翔洋高等学校「沿革」<https://www.h-shoyo.ed.jp/overview/details.php>，2021.7.20参照

校長兼教諭に就き，その後校長職を歴任した。昭和6（1931）年に大洲中学校校長兼教諭，昭和10（1935）年に今治高等女学校校長兼教諭，昭和13（1938）年に北予中学校校長兼教諭，昭和17（1942）年に今治中学校校長兼教諭を務めた。このように，實は昭和戦前・戦時期を通して男女の公立中等学校の運営を担い続けた。なお，實が校長として生徒指導にあたる際は，得意としたのは健康増進・運動推奨の実践であった。大正7（1918）年頃から開始した石鎚登山をはじめ，女学生の制服洋装化，運動・スポーツ推奨，ラジオ体操の導入などが特徴的であった。北予中学校長のときは，生徒を進学組・就職組に編成して，進路指導に力を入れた。

終戦後は私立新田学園の新田中学校に移り，同校長を務めた。さらに，昭和21（1946）年に

松山語学専門学校（のち松山外国語短期大学、昭和35年廃校）、昭和23（1948）年には新学制に対応した新田中学校・新田高等学校を設置させた。占領下のインフレや労働組合の結成によって新田学園の経営は苦境にあったが、昭和27（1952）年頃にはようやく順調となり、昭和29（1954）年に勇退した。ただし、翌昭和30（1955）年に友人であった中井万蔵に招かれ、広島女子商学園に移った。そこで、広島女子商業学校・広島女子商業高等学校長を務めた。広島女子商業学校は制度上中学校だったため、中高一貫教育を目指して両校を運営し、得意の健康管理・スポーツ奨励に加えて専門課程の充実を図った。昭和38（1963）年、広島女子商学園を退職、そのち三原に戻ったようである。

以上のように、實は、父良蔵の影響を受けて漢学の素養と小学校教員の素養を身に付けた後、東京高等師範学校に進学して、父の学歴を超えて新たなキャリアを歩み出した。高師卒業後、10年間師範学校教諭を務め、大正13年以降は公立高等女学校・中学校長として腕を振るった。終戦後、私立中学校（旧制）に移り、新制中学・高校の校長を務め、かつ商業学校・商業高校の校長も務めた。實は、大正末から昭和30年代までの約40年間、旧制・新制中等学校、公立学校と私学、そして進学・職業課程の運営を幅広く経験した人物であった。

3. 沼田家文書による研究の可能性

(1) 沼田家文書の所蔵史料の特徴

ここまで、沼田良蔵・實についてその履歴の概要を整理してきた。沼田家文書は、幕末～昭和期の漢学者、小学校教員・校長、中等教員・校長の生活を記録した貴重な史料群である。まず、調査中のため中間報告的であるが、沼田家文書の特徴を整理しておきたい。

表4は、沼田家文書の所蔵史料を例示したものである。史料選定を十分におこなった上での例示ではなく、文書中から日記・メモ・ノート類を中心に無作為に書き抜いた。所蔵点数はこの十数倍ある見込みである。表4の史料種類「文書」に分類した史料は、冊子になっていない史料をまとめた。手書き史料が多いが活字史料も含む。良蔵関係と思われる三原小学校関係の史料や、御調郡練習会（教員講習会）、校長会、漢学塾、御調郡私立教育会、御調郡私立小学校教員養成所などの史料が含まれる。実関係の史料は、特に広島女子商業高等学校長時代、教育長時代の史料がまとまって残っており、関係校はもちろん、広島県の戦後教育史の史料として極めて価値の高い史料群である。「日記・メモ・ノート」に分類した史料には、良蔵作成と思われる手書きの日記・メモや、実作成と思われる講義録が含まれる。良蔵のメモには授業後に行われた批評会の記録やコメントなどが記されたものが含まれる。また、實のノートには、「大瀬〔甚太郎〕先生」や「吉田〔熊次〕教授」などの高師教授たちの講義録や、専攻した理化学系の講義ノートが多く残されている。広島県師範学校時代の講義録や、同校の教育実習中に受けた指導内容や授業批評会の内容を詳しく記したノート、岡山県師範学校教諭時代に参加した学会の内容や大洲中学校長時代に受けた講習の内容を記したノートも含まれる。「手紙・はがき」に分類した史料には、良蔵宛や實宛、家族宛の私信のほか、校長や郡教育会長などの立場で受け取った手紙類などが含まれ、大量の点数が残されている。点数から言えば、「手紙・はがき」類の史料が沼田家文書の大半を占めており、これが最大の特徴である。手紙・はがき史料は、近代日本教育史研究ではまだまだあまり利用されていないが、歴史学や思想史研究では高い価値を認められた史料である。今後の調査・研究が期待される。「雑誌類」に分類した史料には、広島県私立教育会の機関誌『芸備教育』のほか、御調学生会の雑誌『御調』、實が勤務した学校の同窓会誌が含まれている。これらの雑誌・同窓会誌等は現在散逸が著しく、貴重な史料と思われる。

表4 沼田家文書史料一覧(例)

史料種類	史料番号(仮)	史料名(仮)	備考
文書	b1	規則類 御調郡第四番聯合月次練習会幹事	明治20年6月
文書	b2	校長会録事 御調郡三原町 香雪生取扱	明治22年4月以降
文書	b3	御調郡第五版聯合月次教員練習会々員規約・貯金規約	明治26年4月より実施
文書	b4	私立藹然舎規則 幹事	明治26年9月改之
文書	b5	広島県御調郡私立教育会規則・細則	明治34年6月より施行
文書	b6	寄宿舎々則・寄宿舎生徒心得 御調郡私立小学校教員養成所	明治42年9月30日, 舎則は2部
文書	b7	広島県御調郡私立小学校教員養成所概況及其他	明治44年2月
文書	b8	祭文 友人総代之祭文ほか	良蔵香雪死去
文書	b9	昭和9年度 公民教育講習員名簿 会場 大分高等商業学校	
文書	b10	昭和十六年度 広島県師範同窓名簿	
文書	b11	広島県備後国御調郡三原町私立菁莪舎々則	
文書	b12	広島県備後国御調郡三原高等尋常小学校内規	
文書	b13	評議会手続・事務室整理・教室整理・生徒吊慰法・匡補会規約	
文書	b14	広島県御調郡私立教育会規則	
日記・メモ・ノート	n1	明治二十七年当用日記	
日記・メモ・ノート	n2	香雪齋雑誌	明治28年1月1日以降, 明治29年1月以降日記
日記・メモ・ノート	n3	日記 沼田修蔵ノ出来コトヲ記録	明治28年1月1日~11月8日
日記・メモ・ノート	n4	明治三十五年当用日記	
日記・メモ・ノート	n5	明治四十三年当用日記	
日記・メモ・ノート	n6	明治四十三年当用日記	大
日記・メモ・ノート	n7	NOTEBOOK 付 実験心理学講義題目	明治41年7月24日塚原政治先生
日記・メモ・ノート	n8	西洋史摘要 第三学年 沼田実	
日記・メモ・ノート	n9	Note Book M.Numata	英文・英単語学習? 勤儉論講義録
日記・メモ・ノート	n10	ノート	読書科の目的等
日記・メモ・ノート	n11	ノート	平井授業等 批評会記録か
日記・メモ・ノート	n12	ノート	教案 読方教授形式等
日記・メモ・ノート	n13	(子安先生)地理新揭示 広島県師範学校 生徒 沼田實	明治39年4月4日? 批評会の記録など教育実習記録か(6月2日~16日)
日記・メモ・ノート	n14	Psychology (其一) 大瀬先生	
日記・メモ・ノート	n15	Psychology (其の二) 大瀬先生	第五 感情ノ中 (二) 知覚的感情ノ中(口)から
日記・メモ・ノート	n16	教育学 波多野教授	
日記・メモ・ノート	n17	教育学 (其の二) 波多野教授	
日記・メモ・ノート	n18	教育 波多野教授	
日記・メモ・ノート	n19	P. Tanahashi	教授法か

沼田良蔵・實文書について

日記・メモ・ノート	n20	管理法 山松教授	学校管理法
日記・メモ・ノート	n21	Ethics 吉田教授	
日記・メモ・ノート	n22	Ethics P. Endo	
日記・メモ・ノート	n23	NOTEBOOK	数学教授
日記・メモ・ノート	n24	Mineralogy P.Sato	鉱物学
日記・メモ・ノート	n25	Mineralogy No.3 P. Sato	
日記・メモ・ノート	n26	NOTEBOOK	斜方晶形の内 半面像 ほか
日記・メモ・ノート	n27	Chemistry	
日記・メモ・ノート	n28	化学実験	
日記・メモ・ノート	n29	安藤一雄先生	有機化学?
日記・メモ・ノート	n30	NOTEBOOK	人造染色など
日記・メモ・ノート	n31	ノート	電気・磁場など
日記・メモ・ノート	n32	NOTEBOOK	自転ほか
日記・メモ・ノート	n33	P. Fujiwara	気象学
日記・メモ・ノート	n34	NOTEBOOK	天文学
日記・メモ・ノート	n35	ノート	表紙なし 天体・惑星
日記・メモ・ノート	n36	雑録 高師 沼田実	明治42年9月18日～大正元年11月1日講演録
日記・メモ・ノート	n37	NOTEBOOK	国民道徳研究上の注意
日記・メモ・ノート	n38	MEMORANDA	雑賀教授 新力学ニ就イテ など 岡山物理学会第二回大会順序挟み込み
日記・メモ・ノート	n39	ノート	昭和9年公民教育講習(大分高等商業学校)の記録か 丸山鶴吉氏ほか
手紙・はがき	11	御調郡教育会宛 三橋勝到	明治39年7月 渋谷三上山本教育功績記念
手紙・はがき	12	沼田實宛 沼田良蔵	明治43年9月22日・23日
雑誌類	z1	芸備教育 第65号	明治42年9月25日
雑誌類	z2	御調 第1号 御調学生会	明治27年12月7日
雑誌類	z3	会誌 第9号 愛媛県立今治高等女学校同窓会	昭和11年
雑誌類	z4	会誌 第227号 愛媛県師範学校同窓会	昭和14年
雑誌類	z5	校友 昭和十六年号 愛媛県立松山高等女学校	
雑誌類	z6	志ら菊 第23号 愛媛県立西条高等女学校	昭和4年
雑誌類	z7	桂の友 学友 岡山県女子師範学校	昭和8年
雑誌類	z8	北辰 紀元二千六百年記念号 愛媛県立北予中学校	昭和16年
書籍・冊子	s1	私立広島県御調郡教育会員名簿	明治32年5月 規則・細則付
書籍・冊子	s2	芸備先哲著書目録 広島県教育品展覧会	大正4年
書籍・冊子	s3	矢川徳光『SCIENCE AND HUMANITY』	昭和7年 開隆堂書店
書籍・冊子	s4	藤澤親雄『西欧近代思想と日本国体』思想問題小輯 四	昭和8年 文部省

出典 沼田家文書により白石が作成。

「書籍・冊子」に分類した史料には、『御調郡教育会員名簿』のほか、實所蔵のものと思われる史料が含まれる。このほかに、未整理だが、多くの漢籍がある。漢学者としての沼田家の研究にとって重要な史料である。明治20年代に買い求めたことがわかる漢籍もあり、明治期の漢学塾の実態を示す史料としても貴重である。

沼田家文書は以上のような史料を含む。以下、沼田家文書を用いた研究の可能性を探るため、事例として「広島県備后国御調郡三原町私立菁莪舎々則」（史料番号 b11）と「私立藹然舎規則」（史料番号 b4）を取り上げる。両史料は、沼田家が運営した漢学塾の仕組みを示す史料であり、本稿のテーマ「漢学者から公立学校長への転身」に関わって重要である。

(2) 「広島県備后国御調郡三原町私立菁莪舎々則」について

先述の通り、菁莪舎は、沼田竹溪が明治期に開設したと伝えられる私塾である。「広島県備后国御調郡三原町私立菁莪舎々則」には成立時期が記されておらず、竹溪の時期のものかどうか判別がつかない。後述の通り、良蔵（香雪）が竹溪から菁莪舎を引き継いで整えたものの可能性があるが、いずれにしても、沼田家の私塾の規則と見てよいだろう。残存しているのは、「第一章 通則」（全6条）、「第二章 容儀」（全7条）、「第三章 職任」（5項目）から成る原稿用紙2枚である。学科課程などが残されていないので、第三章以下は欠落している可能性が高い。史料には部分的に見せ消しが施されているが、いつ付されたものか不明である。以下、見せ消し部分は（ ）内に示した（〔 〕内は白石の付記）。

広島県備后国御調郡三原町私立菁莪舎々則

第一章 通則

第一条 菁莪舎ハ滿十四年以上ノ男子ニシテ未タ普通（学）教育ヲ受ケサル者ノ（教育或ハ小学三ヶ年ノ課程ヲ卒ヘ職業ニ就クモノ、）為メニ設ケル所トス

但学齡児童ト雖〔本来は佳なし〕学校ノ余暇ヲ以テ来学スル者ハ之ヲ拒マス

第二条 学科ヲ六級ニ分チ（分チ毎級課業修了スル毎ニ之ヲ（試験ヲ）行ヒ進級セシ〔ム〕ルモノトス）毎級各六箇月間ノ修業トス

第三条 （十年以上）女子ハ入舎ヲ許サス
（但シ）十二年未滿ノ女子ハ通学ヲ（之ヲ）許スモノトス

第四条 学校或ハ家業ノ余暇ヲ以テ通学シー二ノ学科ヲ修ムルモノ之ヲ変則生トス

〔第5条・6条 略〕

第二章（容儀）

第一条 謹慎恭敬ヲ旨トシ互ニ忠信辞讓ヲヲ〔ママ〕以テ相交ルヘシ

〔第2～7条略 ※服装習慣立ち振る舞いなどの細かい決まり〕

第三章 職任

- 一 塾長 諸事ヲ指揮シ塾中一切ノ事ヲ惣理ス
- 一 授義 授義（質問以上ノ）四級以上生徒書中ノ意義ヲ授ク
- 一 素読方 六級五級ノ生徒ニ素ヲ授ク
- 一 監察司 塾生ノ是非善悪ヲ監視シ師家ヘ通報スルヲ掌ル
- 一 局長 一局ノ内ヲ領ス

欠損のため十分意味の了解できないところも多いが、残存する舎則によると、菁莪舎は次のような漢学塾であった。まず、12歳未満の女子を受け入れる場合もあるが、基本的には14歳以上

の未就学男子を中心に対象とする施設であった。そして、6か月の課業を単位として6段階の課程（級）を設け、課業修了ごとの試験によって進級する仕組みをとった。「素読方」「授義」などの役職が設けられ、舎主だけで教えていたわけではなかった。6級・5級の生徒には「素読方」の役割を担う者が「素」を授け、4級以上の生徒には「授義」の役割を担う者が「書中ノ意義」を授けた。6級が最下級であろう。初期段階に、一斉教授ではなく素読を行うのは漢学の学習の基本である。菁莪舎は漢学塾であったとってよい。したがって、「授義」の授ける「書中ノ意義」とは、基本的には経書の意味（義）であろう。また、舎則第二章では、生徒たちには、日常のふるまいや他人とのかかわりの基本として「謹慎恭敬」と「忠信辞讓」に努めることが求められ、袴の着用のほか、書籍器具の取り扱い（第2章第3条）、起坐・戸の開け閉め（同第4条）、衣服の整頓（同第5条）、誹謗や女性の評論の禁止（同第6条）、囲碁将棋などの遊戯禁止（同第7条）が定められた。そこに「監察司」による監視が加わる。これら日常の立ち振る舞いに関する具体的指示とその監視は、礼儀を身体化しようとする漢学の学習の一環と考えられる²⁵⁾。さらに、就学中の児童生徒も入舎を拒むものではなく、就学の「余暇」に通うことを許したが、基本的には入舎生徒は「普通（学）教育」を受けていないことを前提とした。菁莪舎は、明治5（1872）年の学制以降整備されていった公教育制度とは別に設けられた漢学塾といえる。

なお、第一章第一条の見せ消し部分に「小学三ヶ年ノ課程ヲ卒ヘ職業ニ就クモノ」とある。竹溪（明治9年没）の生きた学制期には、小学の課程は下等4か年・上等4か年として編成されていた。学制期に「小学三ヶ年ノ課程」を基準とする発想が生じたか疑問が残る。小学の最低年限を3か年にしたのは明治13（1880）年の改正教育令であった。この舎則は、竹溪時代のものではなく、明治13年以降に良蔵の下でまとめられたものの可能性がある。

(3) 「私立藹然舎規則」について

一方、藹然舎は良蔵が主を務めた施設であることは明らかである。沼田家文書に残る「私立藹然舎規則」には、表紙に「明治貳拾六年九月改之」とある。この文書は明治26（1893）年9月に作成され、「改」とある通り、それ以前にも藹然舎が存在したことを示す。同規則は、「藹然舎概則」と「寄宿生心得（規則）」、「禁止」,「職掌」の4種類の規則で構成された。「藹然舎概則」は、目的を定める前文と学科課程などを定めた全10条から成り、「寄宿生心得」は寄宿生のふるまいと寄宿生内の役職を定めた全5条から成る。「禁止」は塾生活における禁止事項について全7条で定め、「職掌」は5項目で構成され、「舎主兼教師」と「幹事兼助教」、「副幹事」、「舎長」、「副舎長」の職掌について定めた。「職掌」には、「舎主兼教師」として沼田良蔵、「幹事兼助教」として福山正巖の氏名が記入されている。「私立藹然舎規則」の表紙には「幹事」と署名がある。「私立藹然舎規則」のとりまとめは、幹事である福山が行ったようである。「藹然舎概則」の一部は以下の通りである。

藹然舎概則

目的ハ小学校生徒温習并小学教員検定試験予備其他諸官立私立学校入学ノ予備トナス

第一条 本舎ハ本科別科ノ両科トナシ本科ハ専ラ漢学ヲ教授シ別科ハ倫理国語算術其外普通学ヲ教授ス

第七条 本科学課程左ノ如シ

六級	<ul style="list-style-type: none"> — 国史略 素読 — 四 書 全 — 作 文 記事 (仮名交文) 	五級	<ul style="list-style-type: none"> — 十八史略 素読 — 五 經 全 — 作 文 全 — 皇朝史略 輪講
四級	<ul style="list-style-type: none"> — 謝選拾遺 素読 — 外史 (或ハ政記) 講義 — 作文 全論説 	三級	<ul style="list-style-type: none"> — 朱氏小学 講義 — 史記十伝 (或蒙求) 全 — 作文 全
二級	<ul style="list-style-type: none"> — 孟子 講義 — 続正文章軌範 全 — 作文并詩 随意 — 十八史略 輪講 	一級	<ul style="list-style-type: none"> — 論語 講義 — 春秋左氏伝 全 — 作文詩 随意

第九条 別科ハ本人ノ所望ニ依リ普通学科ヲ教授ス可シ

前文の通り、藹然舎は小学校の「温習」と小学校教員検定試験・官私立学校入学の「予備」を目的として、本科・別科の学科を設けた。別科は倫理・国語・算術そのほかの普通学を教授する「温習」と「予備」の目的にかなった学科だが²⁶⁾、本科は漢学を教授する学科であった。漢学の学習が小学校の温習（補習）と教員検定や進学の前備になるという意味付けがされているが、具体的な論理は不明である。学科課程は第7条に本科のみ詳しく定められた。別科の学科課程は第9条の規定のみであり、生徒の要望に応じて臨機応変に課程を変えたことがわかる。本科の課程は、6・5級で四書五経と史書の素読を中心に学習し、4級から外史や小学・蒙求などから講義を始め、1級で論語と春秋左氏伝の講義で終える形に編成された。明らかに漢学の学習に特化した課程である。なお、引用中の「皇朝史略」は3級、「十八史略」は2級の内容と思われる。6級から設定されている作文は、おそらく漢作文（6級のみ仮名交じり文）を指し、2・1級で詩と併記されていることからわかるように、漢詩の制作につながる内容を段階的に編成したものであろう。漢詩については、江戸期にこれを楽しむための詩社や人脈が全国に広がっており、漢詩教育は漢学の入門的学習や詩社の活動に参加するための技術習得、苦しみから自らを解き放つ漢詩の世界に入って「己カー身ノタメ」（広瀬淡窓）にする学問をするなどのために必要なものであった²⁷⁾。漢詩制作には漢学の教養が必須であり、明治期にも漢詩文化を楽しむ人々は一定数いた。藹然舎本科の漢学教育は、目的にある小学校の温習や検定試験・進級の予備のためというより、そうした漢詩文化に参加するための準備教育であったと考える方が違和感なく理解できる。また、「菁莪舎々則」で日常の立ち振る舞いの規則にも漢学教育に関係する内容を確認し、藹然舎でも「寄宿生心得」と「禁止」の中に立ち振る舞いに関する規則が示されたが、藹然舎の規則には漢学的な要素は見当たらない。

良蔵（香雪）は藹然舎で何をしていたか。「職掌」によると、「舎主兼教師」（良蔵）は、「本舎ノ全権ヲ有シ幹事舎長ヲ監督スルモノトス。并ニ經史子集ノ書物ヲ講読シ、学生ノ詩文ヲ添削シ、時ノ試験ヲ掌、又授業ノ諸事ヲ主管スル者トス」とある。なお、舎主兼教師が監督する「幹事兼助教」は、「舎主ノ命ニ従ヒ、塾中一切ノ事ヲ管理シ、又近易ノ諸書ヲ講読シ、教師不

在ノ時ハ是カ代理ス」を役割とした。また、「舎長」は、「時限ノ督促、課業ノ勤惰、諸生ノ品行ヲ監督シ、学業ヲ奨励シ、又学生ノ食料塾費ヲ毎月末ニ統計シ之ヲ取纏メ、幹事ノ元ニ収ムルモノトス」とある。ここから、藹然舎の具体的事務は幹事・舎長が行い、舎主兼教師はその監督をしながら授業に集中するような仕組みであったことがわかる。良蔵は幹事・舎長の事務を監督しながら、基本的には漢書の講読や詩文の添削、試験の実施などの授業にまつわる諸事を助教の助けを借りながら執行していたようである。

以上の通り、藹然舎の目的は小学校の温習や教員検定・進学の子備であり、普通教育のための別科に適合的であった。しかし、藹然舎では本科として漢学教育が行われた。明治26年改正の「私立藹然舎規則」には、教育の目的と内容に不一致が確認できる。そこには、変化する時代の中で漢学塾をいかに運営するかについての良蔵の迷いが表現されているとみるべきだろう。漢学教育には伝統的な漢詩文化への参加という一定の社会的意味があったと思われるが、良蔵はそれを明確に目的に掲げなかった。かつて竹溪や香雪は漢学によって立身することができた。しかし、1880年代以降、日本では学歴社会が形成され始め、小学校は立身出世・学歴競争の出発点になり、漢学の立身的意味は失われた。漢学者でありつつ小学校長でもある良蔵は、明治の時代に漢学塾を継続する意味について悩まざるを得なかったのだろう。明治26年時点では、漢学塾の伝統は残しながら、実質的には普通教育や教員免許取得・進学のための別科を置かざるを得なかった。その後、良蔵が息子を藹然舎で学ばせながらも跡を継がせなかったのは、息子たちが諸学校を経て他県に出たことが直接の理由だろうが、学歴社会形成の中で漢学塾がその意味を失っていったことも歴史的背景として重要であろう。なお、藹然舎の目的に小学校教員検定試験の子備があったことは、良蔵の関心が明治30年代に急に小学校教員養成に向かったわけではなく、このころから存在したことがわかる。

おわりに

以上、沼田家文書の史料価値をその一部から明らかにしてきた。そこから見えてきたのは、漢学によって身を立てた郁太郎（竹溪）、漢学者として身を立てながらも公立学校長に転身して自らの両面性に葛藤した良蔵（香雪）、漢学の素養を身に付けながら漢学塾を継がずに公立学校長として身を立てた實という、沼田三代の生きざまであった。近世の漢学者や寺子屋師匠が明治初期に近代学校教員に転身し、その教育理念や内容の違いに葛藤したことは知られるが²⁸⁾、明治中期以降に至っても漢学の伝統が教職のあり方に葛藤をもたらしたことは管見の限り明らかではない。社会的移動のよりどころが漢学から学歴へと移行し、学歴社会が形成される中で、漢学者家系の出身者がどのように葛藤し、学校教員を選んだか。沼田家文書には学歴社会＝近代社会の形成が与えた教職への影響の一端が見いだせる。

注

- 1) 江戸期・明治期の教職者の連続・非連続に注目する先行研究には、鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』（塙書房、2012年）や井上快「幕末期における藩儒の『孟子』講義—吉村秋陽・斐山に着目して」（『日本の教育史学』第63集、2020年、6～18頁）などがある。
- 2) 沼田竹溪・香雪・實の墓は三原市香積寺（こうじゃくじ）に在る。
- 3) 村上節太郎編『沼田実先生教員生活五十年記念誌』大谷丈夫、1963年、13～14頁。
- 4) 手島益雄『広島県統儒者伝』東京芸備社、1925年、15頁。
- 5) 文部省編『日本教育史資料 参』文部省、1890年、439～440頁。

- 6) 手島益雄『広島県統儒者伝』, 11頁。
- 7) 手島益雄『広島県統儒者伝』, 15頁。
- 8) 文部省編『日本教育史資料 九』(文部省, 1892年, 152頁)によると, 沼田郁太郎を塾主とする漢学塾「静修舎」が天保14(1844)年に開業, 嘉永6(1853)年に隆盛, 明治4(1871)年に廃業とある。竹溪が家塾を開いたのは天保14年ごろと推定される。
- 9) 文部省編『日本教育史資料 参』文部省, 1890年, 438~439頁。
- 10) 文部省編『日本教育史資料 五』文部省, 1891年, 197頁。
- 11) 広島大学二十五年史編集委員会編『広島大学二十五年史 包括校史』広島大学, 1977年, 500頁。
- 12) 中宿俊一編『創立六十年史』広島県三原尋常高等小学校, 1933年, 2頁。
- 13) 深井常四郎編『御調郡誌』御調郡教育会, 1925年, 85頁。
- 14) 深井常四郎編『御調郡誌』, 391頁。
- 15) 村上節太郎編『沼田実先生教員生活五十年記念誌』大谷丈夫, 1963年。
- 16) 小島秀哲「回顧」中宿俊一編『創立六十年史』, 104頁。
- 17) 深井常四郎編『御調郡誌』, 186頁。
- 18) 「臨時検定試験の成績」『芸備教育』第49号, 広島県私立教育会, 1908年5月, 6頁。
- 19) 「第六回広島県聯合教育会」『芸備教育』第30号, 広島県私立教育会, 1906年10月, 5頁。
- 20) 鈴木理恵「明治16年『広島教育協会雑誌』第1~3・5号」『広島教育史学』第2号, 広島大学教育学部日本東洋教育史研究室, 2011年, 65頁。『広島教育協会雑誌』第2号, 1883年(3月か)に乙会員として名前が挙がっている。
- 21) 「第二回総集會」『広島県私立教育会雑誌』第26号, 広島県私立教育会, 1889年12月, 6頁。
- 22) 「大日本教育会人名録」『大日本教育会雑誌』号外, 総集會記事第一, 大日本教育会, 1888年9月, 301頁。「帝国教育会功牌贈呈式」『教育公報』第271号, 帝国教育会, 1903年5月, 70頁。帝国教育会では功牌を贈呈した者は名誉会員扱いとすることになっていた。
- 23) 深井常四郎編『御調郡誌』, 391頁。
- 24) 村上節太郎編『沼田実先生教員生活五十年記念誌』大谷丈夫, 1963年。
- 25) 辻本雅史『「学び」の復権一模倣と習熟』角川書店, 1999年。
- 26) 別科の科目に, 尋常・高等小学校の「修身」科でなく, 尋常中学校の科目である「倫理」科が挙げられた点は興味深い。尋常中学校進学者を意識しての科目設定かもしれない。
- 27) 山本さき「咸宜園隆盛における漢詩教育の意義」日本歴史学会編『日本歴史』第646号, 2002年3月, 54~69頁。
- 28) 例えば, 宮坂朋幸「教職者の呼称の変化に表れた教職者像に関する研究—明治初期筑摩県伊那地方を事例として」『日本教育史研究』第22号, 日本教育史研究会, 2003年, 71~97頁。

—2021年9月22日 受理—